李徳全

日中国交正常化の「黄金のクサビ」を打ち込んだ中国人女性

週刊エコノミスト 2017年 7月18日号

Book Review

歴史書の棚

日中関係を劇的に改善させた中国人女性

加藤 徹（明治大学教授）

近現代史は宝の山だ。埋蔵金のような史実が今も眠っている。程麻・林振江著『李徳全―日中国交正常化の「黄金のクサビ」を打ち込んだ中国人女性』（林光江・古市雅子訳、石川好監修、日本僑報社、1800円）は、1950年代の東西冷戦時代に日中関係の突破口を開いた先人の知恵を掘り起こした刺激的なドキュメンタリーである。

54年、中国紅十字会会長の李徳全（1896～1972年）が、日本赤十字社の招きで来日した。彼女は欧米でも評価が高かった馮玉祥将軍の未亡人で、キリスト教徒で、共産党員ではなかったものの新中国の衛生大臣だった。

当時、日中両国はまだ法的には戦争状態が続いていた。日本や米国が認める「中国」は台湾政府だった。そんな時代、共産圏の女性大臣が来日できたことは奇跡的だった。実際、中国の周恩来首相は「日本の土さえ踏めば、すなわち私たちの勝利だ」と言って李徳全を送り出した。彼女の来日により、中国残留日本人戦犯の帰国問題は解決し、日中関係は劇的に改善した。

日本の民衆は李徳全を熱狂的に歓迎した。日本政府は、李との公的接触を避け続けた。吉田茂首相は米国に外遊して逃げた。台湾政府は、李の入国を認めた日本政府を非難した。日本の公安警察は李を暗殺する計画を察知して阻止した。財界は日中貿易再開への期待をふくらませ、李に接触した。ついには皇室も動いた。李徳全来日は、主権回復後まもない日本の知恵と外交力が試された画期的な外交イベントだった。

49年に建国したばかりの新中国は、ひ弱だった。周恩来首相は、日本との関係樹立こそ西側諸国への外交デビューの突破口になると考え、秘密兵器として李徳全という女性を送り込んだ。そんな李徳全とは何者か。それは本書を読んでのお楽しみである。

よく「現在の日中関係は戦後最悪」と安易に言う人がいるが、50年代の日中関係は今よりずっと悪かった。李徳全の来日は、行き詰まった日中関係を打開したモデルケースとしてもっと研究されるべきであろう。

この欄は日本史・現代史・中国史・西洋史の順番で掲載します。

毎日新聞 MAINICHI 2017年（平成29年）8月20日（日）

李徳全―日中国交正常化の「黄金のクサビ」を打ち込んだ中国人女性

石川好監修 程麻、林振江著（日本僑報社・1944円）

63年前の1954年10月30日、中国紅十字総会代表団が訪日した。羽田空港から第一京浜国道まで出迎える人で埋め尽くされ、とりわけ1000人を超えるBC級戦犯のリストを携えた李徳全団長の一挙手一投足はマスコミの注目の的となった。

日本の政界も強い関心を示し、一行の来日に先立って5カ月、衆参両院では代表団招請に関する決議が可決された。日中関係史上、転換点となる出来事の一つだが、これまでほとんど忘れられていた。本書によってその顛末が初めて紹介された。

中国紅十字総会の会長として、李徳全は早くから中国残留日本人の帰国に尽力した。50年10月、初代衛生部長（日本の厚労大臣に相当）を務めた彼女はモナコで開催された会議中、邦人帰還について日本側に打診し、53年から3万人を超える邦人の帰国を実現させた。

馮玉祥の夫人として戦前にも一部の報道があったし、戦後の来日に際して、新聞で人物紹介があった。だが、その伝記的な事実はほとんど知られていない。本書のお陰で、李徳全の生立ちや、キリスト教信者としての一生も明らかになった。

＝林光江、古市雅子訳（競）

文藝春秋 2017年9月号

終戦から72年 秘話開封！

BC級戦犯を帰国させた中国の女傑

渡辺満子（元日本テレビプロデューサー）

戦犯名簿を日本にもたらした李徳全の足跡を辿る

日夕刻、終戦の知らせを聞いた人々は、カーテンの内側で、共和国から、初代代表団は十四日間の日程で、羽田空港に到着した。彼女は、名古屋、京都、奈良、神戸を訪問した。彼女は、国内に抑留されていた戦犯の名簿を持って、コートに纏った、彼らの、「黄金のクサビ」を打ち込んだ中国人女性』程麻・林振江著）。

新文化 出版界唯一の専門紙 2017年 8月10日

日本僑報社

中国関連書 2点話題に

日本僑報社がさきごろ発売した片山和之『対中外交の蹉跌 上海と日本外交官』と程麻／林振江『李徳全』、その中国関連書2点がマスコミで話題になり、様々なメディアの取材が進められている。

9月に日中国交正常化45周年を迎え、さらに北朝鮮の挑発的な軍事実験が繰り返されるなか、今後の動向が注目される中国。そうした背景もあり、両書にスポットが当てられている。

『対中外交の蹉跌』の著者は、2015年8月に赴任した現役の上海総領事。

上海は戦前、総領事館、公使館、大使館事務所が設置され、日中外交の一台拠点だった。しかし、中国陸軍に代表される武官エリートに翻弄され、明治の開国以降も日本の遺産を崩壊させてしまった。日本外交官の役割と限界、対中外交の蹉跌の背景を描き、今後の教訓と視座を提言した。本体3600円。

片山氏は8月1日、東京・池袋にあるIKE・Bizとしま産業振興プラザ（旧勤労福祉会館）で講演した後、同3日に会見を行い、50人を超える報道関係者が駆けつけた。

日本僑報社は歴代の日本外交官が上梓した書籍12点を刊行。同書で13点目となる。創業してから21年間で約340点の中国関連書を発行している。

同社の段躍中編集長は「両国の理解を深めるためにいい本を出していきたい。『対中外交の蹉跌』もそうした気持ちで刊行した。書店員の方々にも理解してほしい」と述べている。

また、『李徳全』のタイトルになっている李氏は日中戦争後の1954年、中国代表団を率いて訪日し、B・C級戦犯とされ、中国に慰留していた1000人余の日本人を日本に無事帰国させた女性。受け入れ先は日本赤十字だった。

戦後の日中交流は、中国側がこの1000人を日本に帰還させたことから始まったとしている。当時の様子を詳細に書いた同書も注目を集めている。本体1800円。

日本と中国 2017年8月1日

"日本と中国"を読む

李徳全

日中国交正常化の「黄金のクサビ」を打ち込んだ中国人女性

石川好〈監修〉程麻・林振江〈著〉、林光江・古市雅子〈訳〉

戦後の日中交流は、中国大陸に残された日本人居留民とB・C戦犯を日本に帰還させることから始まっている。

なぜ、戦犯とされた1000人前後の生存者が無事帰国できたのであろうか。それは、李徳全という、当時中国で最も著名な女性が動いたからであった。李氏の夫は、馮玉祥。西北軍閥の将軍で、「クリスチャン・ジェネラル」とも呼ばれていた人物である。

今年の2017年は日中が国交正常化して45周年の節目の年である。その記念すべき年に日中関係が正常化する18年も前の知られざる秘話が明かされる。

李徳全は、日中国交正常化が田中角栄と周恩来の手によって成される1972年9月29日、その5カ月前の4月23日に亡くなっている。彼女は日中国交正常化のために「黄金のクサビ」を打ち込みながら、それを知ることもなく天に召されたのであった。